

ジェンダーフリースペース通信 号外号

GENDER FREE

PRESS

〒195-8585

東京都町田市金井町2160

和光大学G112(G棟1階)

044-989-7777 内線4112

www.wako.ac.jp/gender/

2006.01.発行

和光大学



「ジェンダーフリー」という言葉の使用自体が自粛され活動が続いています。そんなある日、スペース通信自体は年二回しか発行されていないというのを知ってしまったのははじまりでした。もうほんの少しだけ、アウトプットしよう！ということになり映画評や漫画、書評特集を組みました。編集方針は当初映画、書評（漫画含む）の予定でしたが、のんびり屋の編集人は執筆者の気の赴くままにまかせ、文体もお任せ、作品選択もお任せでした。結果的に作品がかぶっていたり、当初書くといっていた作品とは別作品だったり、落ちたり浮いたりしましたが、そこがミニコミのいいところ。落ちたり浮いたり正規子に抜かれたりもしましたが、号外号発信します。本稿を書いてくださったみなさん、本当にありがとうございます。

(十)

## 戦火の勇氣

ジェンダーに敏感な視点で見えてほしい作品

湾岸戦争で自分の命令による誤射で親友を失ったサーリング中佐、帰国後、彼は名誉勲章候補者を調査するよう命ぜられる。候補者は湾岸戦争で戦死した救出ヘリの女性パイロットのウォー

ルデン大尉。しかし、救出された兵士たち、また、彼女の部下の証言はそれぞれ微妙に違う……。

最後に明かされる真実はあまりに酷いものだった。

彼女の下す命令には一切の遅れも迷いも揺れもない。

的確で正確無比。にもかかわらず部下の男性兵士に

撃たれ重傷を負う。その上救援が来たときには、彼

女の援護射撃で逃れた部下に戦場に捨て置かれ、自

軍が投下したナパームで焼かれる。そして、食い違

う証言の中の「Captain Walden is dead.」「She's

dead.」にその酷さが凝縮されている。彼女は、「女」

だったからこそ、部下に裏切られ焼かれたのである。

彼女を撃った男性兵士は、自分よりもより「男」で

あるとしか思えない上官を、とても肯定できず、そ

の証言の中では、彼女を極端に「女性的に」変え、自

分の「勇敢ではない」発言を彼女の発言にし、彼女の

命令を自分の発案だともする。そして、その嘘が露

見したとき、どこまでも「男」であり続けるために、

彼は機関車に突進するという死を選ぶのである。

史上初の女性への名誉勲章は、「女性」ゆえに部下

に裏切られた死に対し授与され、その勲章はホワイ

トハウスの庭で、大統領の手で、彼女の遺された一

人娘の首にかけられる。

この幾重にもゆがんだ現実には、ジェンダーの視点な

しには見えてこないものだろう。(勘解由小路承子)

(1996年アメリカ/監督エドワード・ズウィック、出演デンゼル・ワシントン、メグ・ライアン)



女性の自立をテーマにした『モナリザ・スマイル』が2004年に公開された。美術史を教える1人の教師が、全米一保守的といわれる女子大へ赴任したことから物語が始まる。リベラル志向で個性的なその教師が、「良き妻」になるための教育を受けている学生たちに、自分の頭で考えることの大切さを教え、彼女たちの自立を促していくというストーリーだ。

いくつかあるエピソードの中のひとつに、卒業後家庭に入るか、大学院へ進学するか迷っている学生の話がある。主人公の教師は、「進学を望むのならそうすべきだ、学問は家庭と両立できる」と諭し、時に少し強引なやり方で進学のための手助けをしていたのだが、結局その学生は結婚後「家庭を中途半端にするくらいなら大学を捨てる」と「自ら」専業主婦になる道を選ぶ。

将来の夫や周囲の人々から家庭に入ることを要求されているその学生にとって、どういう道を選択したいかという彼女自身の問題の他に、それを可能にする家庭環境もまた考えるべき問題であるはずである。しかし残念ながら、この映画の中では、彼女に対してだけ「家庭と学問は両立できる」と励ますのみで、教師からその夫への働きかけのシーンがあまりない。最終的に誰がどのような選択をするかではなく、選択をするまでの過程を描くこともまた、「自立」を考える手がかりになるのではないだろうか。私がこの映画に対して今一步惜しいと感じる点のひとつである。

(2003年アメリカ/監督マイク・ニューエル、  
出演ジュリア・ロバーツ、キルスティン・ダンスト)



## 海女のリャンさん

渡辺学

日本の植民地支配の1916年に済州島に生まれ、日本に渡った在日一世の女性・梁義憲(リャン・イーホン)さんの生活を三年間に渡って記録した長編のドキュメンタリー映画である。

わたしは、この映画をみる前、映画のチラシをみていて号泣してしまった。そんなわけだから映画を実際にみた時も90分間涙が止まらなくて大変だった。

リャンさんというこのハルモニが生きてきた道に、そのまま朝鮮民族自体の100年に及ぶ苦難の歴史が映る。日本帝国主義によって植民地支配をされ、解放後も朝鮮戦争によって南北に分断され、米ソ冷戦のなかで対立の時代が長く続いた歴史。三八度線に引かれた休戦ライン。この分断線から、この60年間にどれだけ多くの血と涙が流れたことだろう。このような時代のなかで、国家に翻弄されながら「異国」日本で懸命に生きてきたのが、この在日一世のハルモニなのだ。

リャンさんは民族学校の教員をしていた夫と子どもたちの生活のために「海女さん」の重労働に従事した。その子どもたちは、日本と南北朝鮮に離散して暮らしている。だが、南北に住む子どもたちといつでも会えるわけではない。朝鮮籍のリャンさんは北に住む子どもと会うために、万景峰号に乗る。日本では「工作船」などとキャンペーンされるが、実は朝鮮籍の人と祖国を結ぶ役割を果たしている。また南にも簡単に行くことは許されていない。金大中(キム・デジュン)政権以降の太陽政策によって、ようやく最近故郷の済州島(チェジュト)に行くことを許されたばかりである。子どもたちと会える数少ない機会。その際の高齢のリ



舞台は1953年アメリカ。名門ウェルズリー大学に、新任教師がやってきた。彼女の名はキャサリン・ワトソン（ジュリア・ロバーツ）。夢は米国一保守的な生徒に、自立する力と進歩的な教育を与えること。しかし、彼女たちの憧れは「良き妻」になることだった。伝統を重視する人々の反発を受けながらも、キャサリンは毅然と、「自分の頭で考えることの大切さ」を教える。そんな彼女と生徒たちに、人生の選択の時が迫っていた。

戦後の女性の生き方が大きく揺れ動いていた時代。そこで学ぶ学生は大学を卒業したら結婚し、家庭にはいる、それが幸せなのだと教え込まれていた。そして、それを信じていた。この映画には本当に様々な女性が登場する。自分の夢との狭間で揺れる者。エリートの恋人と結婚したが、その生活に幸せを感じられず、伝統や世間体との間で板ばさみになる者。周りから求められる女性像と自分との間にギャップを感じる者。そして、新任教師キャサリンも自分と恋人との関係に思い悩む。学生たちはキャサリンの考えに触れることで新しい、自分らしく生きる道を考えるようになる。また、それは学生たちだけにいえることではなく、そんな学生たちの姿を見ることで、キャサリンも自分の生き方を考え、成長していく。結婚し家庭にはいることだけが全ての女性の幸せの道ではない。また、その逆に仕事をするだけだけが全ての女性の幸せの道ではない。自分で考え、選択をすること。その大切さをこの映画は教えてくれる。特典映像も製作者、出演者のインタビューや1953年という時代と今の比較など見所がたくさんあるので、ぜひDVDで見ることをお勧めしたい。



ヤンさんがみせる言動や行動に、南北朝鮮と日本の過去と現在が見え隠れするようだ。

80年代後半に韓国の民衆は長い民主化闘争を経て軍事独裁政権を倒した。さらに、この十年で韓国社会は大きく変化し、2000年には南北共同宣言が出された。アメリカの出かた次第で楽観はできないが、民族の和解と祖国の統一にむかつていくにちがいない。

しかしながら、ここ日本社会では2002年の日朝首脳会談以降、朝鮮半島をめぐる好戦的な雰囲気幅をきかせている。日本の政権からは過去の植民地支配や侵略戦争を肯定する言動が目立ち、首相も靖国神社に参拝してはばからない。それと並行してイラク派兵や教育基本法や憲法の改悪、在日米軍再編・強化など「戦争をする国」への動きも進んでいる。それでも国民の多くは無関心である。このままでもいいのだろうか？

最後のシーンで、リャンさんは「なんにも変わっていないよ。希望なんてないよ」と絶望を口にする。わたしたちはその声に心えることができるのか。そのために何ができるか。

2005年は日本の敗戦60周年。朝鮮半島の解放・分断60周年。日韓国交回復40周年。ちなみに第2次日韓協約で日本が朝鮮半島を保護国化してから100周年でもある。このような節目の年にわたしたちが考えたいことは山積している。そんな今こそ、この映画を多くの人がみて、リャンさんたちの人生を通して過去と現在に思いを馳せてほしい。

（2004年日本／監督、原村政樹  
語り、康すおん）





# NANAの時代

長田円香

少女漫画「NANA」宮崎あおい・中島美嘉主演の映画も大ヒットしてま  
すね。ご存知の方も多かるうと思いますが、主人公は二人のナナという  
名の二十歳の女の子です。一人目の「ナナ」はバンドのボーカルを努  
め、自分のバンドで食べていくのを目標にしています。

二人目の「奈々」は就職難の過酷な現代に生きる、上京アルバイト  
です。仕事よりも彼と過ごす時間が好き。  
小さい頃から夢はこれと言ってなくあえて  
言えば「花嫁さん」でした。

恋愛に生きる女と夢（仕事）に生きる女、  
こう分けてしまえば簡単ですが、二人とも  
今の自分に閉塞感や遣り切れなさを抱えて  
います。

NANAが女男問わず若者に支持されて  
いる理由はいくつもあると思いますが、  
この漫画が強く支持される根底には、現代  
の若者の不安や葛藤を内包している部分  
があるからではないでしょうか。

就職も大変だけど女性が仕事を続けていくのはもつと大変・フリー  
ター、ニート、不安定な雇用形態、正規雇用でも不払い残業など劣悪な  
労働環境、就職できたとしても長く続けていけるのか、自分の将来に不  
安要素はいっぱいあります。

それならば女の子だもんゝ恋愛や結婚によってしあわせになりたい！  
と言っても、この漫画には従来の少女漫画で描かれてきた「幸せな結  
婚」はありません。主人公を救ってくれる王子様も「結婚しあわせ」  
という図式もなく、ひたすら自分の居場所を求めてもがく主人公に共感  
してしまいます。



（2005年日本／監督大谷健太郎、出演者中島美嘉、宮崎あおい  
原作矢沢あい、集英社）

## のだめカンタービレ

一週間ほど前、『のだめカンタービレ』を同居人が買ってきた  
てしまったため、三日間寝不足となっていました。ぐす  
ん。

クラシック音楽を勉強する学生の学園もの。のだめは楽  
譜が読めないけれど、一度聞いた曲は覚えてしまうほど、耳  
がよくピアノの音もたまにすばらしいというヘンな女の子。本  
人、女の子らしさを否定しているわけじゃないけど、不潔だ  
しまるではまらない（部屋はゴミため、髪はくさい、ごはんか  
らイクラが生えてる）。突然好きなセンパイに料理をつくら  
うとしてみるが、とんでもない料理なので、彼のほうが見か  
ねてイタリア料理なんか作って餌付けしてしまう、変な関  
係。彼は有名なピアニストの父と母が離婚、母方で育ち、指  
揮者をめざし、才能もあり努力もするかつこい系の男の  
子。だが実は弱点あり。のだめを変態といいながら、いつしよ  
にパリに留学までしてしまい、だんだんに恋人に……という筋  
なんです。

取材が綿密、ディテールがしっかりしていて「動物のお医  
者さん」系のずつけ度と、シンデレラ物語系がミックスして  
いるのかな。

マンガといっても、私の好きな大島弓子様は、ガンで手術し  
たあと、少ししか描かれていないです。吉田秋生は好きだけ  
ど『ラヴァーズ・キス』後にはまれるマンガがない今日この頃、  
けつこう『のだめ』は絵も好きで楽しんじやいました。

(chieko)

（二ノ宮知子 講談社  
2002年一〇十三巻）

